

## 「古典に親しむ」とはどういうことか

筑波大学附属駒場中・高等学校 国語科

有木 大輔・澤田 英輔・杉村千亜希  
関口 隆一・千野 浩一・東城 徳幸  
平田 知之



## 「古典に親しむ」とはということか

筑波大学附属駒場中・高等学校 国語科

有木 大輔・澤田 英輔・杉村千亜希  
関口 隆一・千野 浩一・東城 徳幸  
平田 知之

### 要約

「生涯にわたって古典に親しむ態度」を育成するにあたり、「生涯にわたって」という点について、より検討を深める必要がある。生徒を古典について考える主体者と位置づけるべく、国際交流の場で日本の伝統的文学を紹介するという場面を想定させ、生徒がどのような古典観を有しているかを調査した。そこから浮かび上がる「期待される古典」と古典教育の現状とを比較した結果、掛詞に見られるような複数の文脈を生み出す言語表現と、本歌本説取り・引用・パロディー等に見られるような、先行する古典作品に依拠する構造について、より指導を深めるべく、教材開発が必要であるとの結論に至った。

キーワード：古典教育 掛詞 本歌取り 国際交流 学習指導要領

## 1 本校生徒（高校2年生）の古典観

### 1.1 調査概要

本校生徒の古典観を把握するべく、高校2年生を対象に、「国際交流の場で、日本の古典文学のすぐれている点、ユニークな点、特徴などを外国人に紹介するという状況を想定して、その原稿を作成する」という課題に取り組みさせた（2014年11月、本校国語科千野の授業内で実施）。「国際交流の場で」としたのは、本校がスーパーサイエンスハイスクールの指定を受け、グローバルサイエンティストを育成するという課題のもと、国立台湾台中第一高級中学、釜山国際高校、上海国際高校、その他の海外の学校と研究交流をしていることを念頭に置いたものである。後述するが、今年度は筑波大学の「日本・アジア青少年サイエンス交流事業（さくらサイエンスプラン）」（JST事業）による交流プログラムとして、上海中学（日本における高等学校）の生徒12名を交えて古典の授業を実施したこともある。このように、今後ますます盛んになるとと思われる海外の人との交流の場において、自国の古典文学について自らの知るところを説明できる力を身につけることが、実用的な意義も含みつつ、生涯にわたって古典に親しむ態度の育成に結びつくものと考えた。

この課題に取り組む上で、生徒は、古典の意義を海外の人に向けて説明する側に置かれることになる。言

い換えれば、一時的にはあるが、古典を教えられる受け身の立場から、必要に迫られて自らその意義を考えなければならぬ立場に置かれることとなる。結果として示された作文は、内容的に深いものと浅いものの差はあるものの、いずれも生徒の現時点での理解に基づいて、古典の面白さや意義を説明しようとするものとなっている。

以下に、生徒の記述した内容から、生徒がどのような古典観を有しているのかを概観したい。

### 1.1 生徒が重要だと考える古典作品

上記のような意識で書かれた作文において、生徒が海外の人に伝える意義があると考えた古典作品名を、記載が多かった順に挙げると以下のとおりになる。

（148名分のデータから抽出、丸数字は順位、（ ）内の数字は人数を示す。以下同。）

- ① 源氏物語 (50)
- ② 枕草子 (33)
- ③ 竹取物語・古事記・万葉集 (9)
- ⑥ 土佐日記 (7)
- ⑦ 平家物語 (6)
- ⑧ 伊勢物語・百人一首・徒然草・日本書紀 (5)
- ⑫ 古今和歌集 (4)
- ⑬ おくのほそ道・落窪物語・方丈記・御伽草子 (3)

---

What should we aim for in education of the classical literature ?

その他、『大鏡』『紫式部日記』『とはずがたり』『十訓抄』『今昔物語集』『雨月物語』『西鶴諸国ばなし』など教科書や入試問題として取り上げられることが多いものの以外に、『竹馬狂吟集』『犬筑波集』『修紫田舎源氏』の書名を挙げる者もいた。

次に多く取り上げられた人名について同様に記す。

- ① 松尾芭蕉 (14)
- ② 紫式部・清少納言 (12)

4位以下は、松永貞徳・山崎宗鑑・西山宗因・向井去来・与謝蕪村など、授業で扱った俳人の名や、紀貫之・在原業平・小野小町・本居宣長・藤原定家・藤原俊成の名が挙げられた。

## 1.2 生徒が重要だと考える古典ジャンル

作品名や人名として挙げられることがないが、作文の中でキーワードとして取り上げられたジャンルは以下のとおり。

- ① 和歌 (49)
- ② 俳句・俳諧 (45)
- ③ 連歌・連句 (17)

たとえば『源氏物語』などと具体的な作品名が示されている場合は、「物語」としてカウントしていない。そのため、この項目のみでの順位はあまり意味をなさないが、全体のおよそ3分の1の生徒が和歌・俳句・俳諧を海外に紹介するべき主要ジャンルとして挙げていることになる。③の連歌・連句は、授業で言及したことがあったことが影響していると思われるが、であるにせよ、これほど多くの生徒がこのジャンルに言及していたのは予想外であった。

1.1 と併せて考えれば、物語への言及が最も多く、次に和歌・俳句（俳諧）が挙がり、随筆がこれにつづく。日記への関心も比較的高いと言ってよからう。

## 1.3 生徒が重要だと考えるテーマ

作文で取り上げられることが多かったテーマを内容によって分類すると、次のようになる。

- ① 文脈の二重性に関する考察（掛詞や言葉遊び等） (33)
- ② 省略の多さ／婉曲表現・曖昧さ／文脈依存 (27)
- ③ 古典常識（特に恋愛に関する事項）や社会的背景

に関する知識の重要性 (24)

- ④ 先行する古典作品に依拠する構造（本歌本説取り・パロディー・引用等） (20)
- ⑤ 語彙の多様さ・豊かさ・難しさ (17)
- ⑥ 漢字の伝来の経緯／平仮名の表現性 (17)
- ⑦ 現実的・日常的内容の多さ (15)
- ⑧ わび・さび・無常観・もののあはれ (13)
- ⑨ 季節感 (13)
- ⑩ 女性作家の多さ／女性の役割 (12)
- ⑪ 敬語 (10)

①の「文脈の二重性」や、④の「先行する古典作品に依拠する構造」は、知的に言語を操作する要素、言い換えれば謎解きのような仕組みが、生徒にとって魅力と感じられた結果であると思われる。②の「省略の多さ／婉曲表現・曖昧さ／文脈依存」や⑤「語彙の多様さ・豊かさ・難しさ」⑩「敬語」は、読解を主眼とする授業・学習において、通常は困難とされる要素であるが、良かれ悪しかれこれらを古典の特徴と捉えていることが窺える。⑥の「漢字の伝来の経緯／平仮名の表現性」や⑨「季節感」⑩「女性作家の多さ／女性の役割」は、作文の主題である「国際交流の場」を強く意識したものと考えられる。

## 1.4 国際交流を意識した古典教育

このような調査は、それまでに生徒がどのような古典に触れてきたかに大きく左右されるものである。そういった要素を差し引いて情報を検討しなければならないが、全体の傾向として、物語への言及が多いのは予想されることとして、和歌・俳句・俳諧（\*「松尾芭蕉」が言及される人名で最も多い）、あるいは連歌や連句への言及が突出して多いということははっきりと指摘できる点であろう。また、高等学校の「国語総合（古典）」および「古典B」教科書に採られる作品の比率と比較したとき、和歌・俳句（俳諧）・連歌、あるいは『古事記』『日本書紀』は総じて教科書ではあまり比率が高くなく、逆に生徒が「国際交流」を念頭に重要と考える作品としては上位に位置するということが言えよう。特に、連歌や連句に至っては、教科書にほとんど採られていないのが現状である。また、教科書に作品が載る場合であっても、実際に授業の場で用いられているかと考えれば、『源氏物語』や『枕草子』などに比べて和歌・俳諧の優先順位ははるかに低いものと推測される。

次に、和歌や俳諧・連歌を生徒が重要だと考えてい

る理由について検討したい。1.3に基づいて考えれば、①の「文脈の二重性」特に「掛詞」、②の「省略の多さ」「文脈依存」、③の「古典常識(特に恋愛に関する事項)」、④の「先行する古典作品に依拠する構造」特に「本歌本取り」、⑧の「わび・さび」、⑨の「季節感」が、和歌・俳諧・連歌に関係している。ただし、②はむしろ物語において深く扱うことができる要素であり、③は主として和歌に関連するが、和歌に限定する必要がない要素であるから、この2項目を除く。さらに下位2項目を除くと、いささか大づかみに括ることになるが、「掛詞」と「本歌取り」に代表されるような古典文学の表現性に、生徒は高い関心を寄せていると言えよう。

以上をまとめると、この調査をとおして浮かび上がってきたのは、次の視点である。

- (1) 古典作品において言葉と意味とが1対1の関係を離れ、複数の文脈が並行して表現されるありよう
  - (2) 明示的・暗示的に先行する別の古典作品に言及することで、文脈に奥行きが生み出されるありよう
- この2点について、本校生徒は、海外の文学あるいは現代の文学にはあまり見られない、「日本らしさ」「古典らしさ」であると捉えているが、実際の授業や教科書の記載においては、参考・脚注といった扱いに留まることが多い。生徒の目線に合わせるならば、こうした従来であれば脇道とされがちな要素にこそ、力を注ぐことが効果的であると予想される。

## 2 実践報告

### 2.1 各実践の概要

今年度、本校国語科教員が行った主な実践概要は次の通りである。

学年(教員名)	実践テーマ
実践内容の概要	

中学

中1国語(千野)	『平家物語』を川柳にする
『平家物語』を読み内容を確認するときに、その部分について詠まれた江戸時代の川柳を提示するようにした。その際、川柳の一部を空欄にして提示し、生徒に考えさせることで、興味を持たせつつ効果的な「まとめ」を行うことができた。たとえば、『平家物語』「鶴」の「井の早太つと寄り、落つところを取っておさへて、続けさまに九刀ぞ刺いたりける。」について、『柳多留』拾遺6所収句「主従で鶴に	

[ ]箇所傷を付け」を提示。正解は「十」(主+従)。

さらに、こうした試みを何回か経験させた上で、新たに読んだ『平家物語』「猫間」の一節について、グループ学習の形で詠史の川柳を実作させた。生徒の作品を一句挙げると、「猫と左馬生まれ違えどしようじき者」。生徒による説明文を引くと「猫(猫間殿)と左馬(木曾義仲)は、それぞれ生まれた場所は違うけれど、それぞれ『小食』者と『正直』者であるという意味」。次の授業時に全クラスの作品をプリントにし、互いに評価させ、フィードバックした。

中1国語(千野) | 草双紙をとおして学ぶ定番教材

黄表紙の作品を教材として用い、絵や地口の謎解きをしつつ授業を進めた。絵や卑俗な洒落に触れさせることで古典を身近に感じさせるとともに、洒落のもととなっている別の古典作品について理解を深めることを目的とする。

用いたのは、山東京伝作・画『一百三升 芋地獄』。テキストには架蔵本の原本コピーを使用。なお、早稲田大学図書館の「古典籍総合データベース」で影印画像の利用が可能である。

<http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/index.htm>

(図書館の利用規程によれば、「学校の授業や学会等で一時的に利用する場合」は申請不要とのこと。利用にあたっては早稲田大学図書館の利用規程をご確認ください。) また、アダム・カバット編『江戸マンガ 1 芋地獄』(小学館、2014年6月刊)がある。これは、絵の部分は原本のままで、文字部分を現代語に意識したもの。

この教材をとおして、『平家物語』「祇園女御」、狂言「朝比奈」、説教節「刈萱」、『孫子』軍争篇などに触れさせた。『芋地獄』は、絵がおもしろく、中学1年生の関心を喚起するのにうってつけであるが、一方で、他の黄表紙作品に比べ有名な古典作品を踏まえることが少なく、また、地口がやや安直、工夫が足りない。目的は戯作の面白さを伝えることだけでなく、本作が踏まえる有名な古典作品に触れさせ、洒落の巧妙さを伝えることであつたので、十分な成果が得られたとは言えない。『平家』の「祇園女御」は本文に関連する表現がなかったため、「芋」(ぬかご)つながりで強引に導入した教材。

高校

高2 古典 (千野)	中国の高校生とともに学ぶ、中日古典文学の融合——与謝蕪村の作品をめぐる——
<p>筑波大学の「日本・アジア青少年サイエンス交流事業(さくらサイエンスプラン)」「JST事業)による交流プログラムとして、平成26年10月8日に、中国、上海中学の生徒12名が来校、上海中学の生徒を交えて、古文の授業を実施した。</p> <p>『古文真宝後集』『後赤壁賦』や『蒙求』を踏まえる蕪村句、俳句・漢詩・漢文訓読体の混合による「春風馬堤曲」を紹介し、最後に、「北寿老仙をいたむ」を英訳して読解させた。「北寿老仙をいたむ」を取り上げたのは、この俳詩の構成上の不可解さや「へげの煙」の解釈をめぐる、興味深い〈謎解き〉を提示することができることと、本作品が、各務支考ら美濃派俳人による絶句や律詩の形式に基づく仮名詩の考案(『本朝文鑑』・『和漢文操』に作品が収録されている)の流れの中に位置づけることができるというのが理由である。</p> <p>「後赤壁賦」は上海中学においても授業で扱ったことがあるそうで、それが日本の俳句の下敷きになっていると知って、中国の生徒から歓声が上がった。</p> <p>本校生徒にとっては、普段「古文」として読解に苦労している古典に、内容的には中国文学の側から、言語的には英語によって触れることとなり、古典の新たな一面を知ることができたとの感想が聞かれた。</p> <p>参考 筑波大学 附属学校教育局ホームページ「附属高等学校、附属駒場高等学校と上海中学が交流会を実施」  <a href="http://www.gakko.otsuka.tsukuba.ac.jp/?p=5774">http://www.gakko.otsuka.tsukuba.ac.jp/?p=5774</a></p>	
高2 (杉村)	古文を書いてみよう—歌物語の制作—
<p><b>目的</b></p> <p>①古文で作文することを通じ、古文単語や古典文法の習熟を目指す。</p> <p>②和歌をもとにした物語を創作することを通じ、韻文と散文の融合した表現形式に触れる。</p> <p><b>授業内容</b></p> <p>1校時: 古文作文の手順・歌物語の形式・表現の解説(プリント配布)</p>	

<p>2校時: 下書き(資料として古語辞書・文法参考書を使用)・『古今集』冬歌のプリント配布</p> <p>3校時: 推敲・友達と交換して読み合い批評・添削⇒教員に提出</p> <p>授業後の生徒の感想からは、「楽しみながら古文に触れることが出来た」「古典文法を自分で使うことで、理解が深まった」という声があり、目的は概ね外さなかったと思われる。作品を友達と読み合い批評する活動については、恥ずかしいなどの抵抗があったが、実際に実行してみると、互いに良い影響を与え合っていたようである。このやりとりが機縁になって、見知った友人の意外な一面を発見するようなこともあったようで、人間関係を深める小さなきっかけにもなったことは望外の収穫であった。</p>	
高2 (有木)	詩語カードで漢詩を作る
<p>漢詩は2字と3字の語句から構成される。実際にある唐詩から3字と3字のカードを作成して、漢詩のルールをヒントに漢詩を復元させる。七言絶句の場合、2字のカードが8枚、3字のカードが4枚となる。本授業では内容も押韻も同じ詩を2首分用意した。この学習で作詩の際の起承転結を学ぶことができる。</p> <p>漢詩はルールが複雑であるため、マスターするのに長い時間を要した。そのため授業内で漢詩を作る時間がほとんど取れなかった。しかしきちんと手順を踏まえつつ、本授業を行なったことで夏休みの宿題に課した自作の詩(七言絶句)は概ね規則を遵守しており、レベルの高い作品が出来た。</p>	
高2 (千野)	貞門・談林俳諧の教材化
<p>山崎宗鑑から貞門・談林の時期を経て蕉風に至るまでの俳諧作品を読んだ。教材は多岐にわたるため、ここに全てを掲げることができない。狙いは、一義的には、「雅俗」の問題を貞門・談林それぞれの作風の違いをとおして理解させること。さらに、芭蕉の俳諧がどのようにして談林的作風から脱皮してきたのか、蕉風俳諧における「わび」「さび」「かるみ」の理念がどのようなものであるかを理解させることである。二義的には、軽快で時に奇抜な貞門・談林の句に触れさせ、古典への親しみを感じさせること、そして、それぞれの句が踏まえる多様な古典に触れさせることである。句意の解説をとおして、『万葉集』『古今集』『後拾遺集』『千載集』『新古今集』『夫木抄』『袋草紙』『今昔物語』</p>	

集』『宇治拾遺物語』『平家物語』『源平盛衰記』『俊頼髓脳』『古今著聞集』『発心集』『太平記』『竹斎』謡曲「三井寺」同「嵐山」同「田村」『莊子』等を読んだ。俳諧に関する文章は、『おくのほそ道』『去来抄』『三冊子』『俳諧問答』や芭蕉書簡等、多数扱った。

## 2.2 まとめ

「生涯にわたって」というところに重点を置いて、古典の面白さを生徒に伝えるにはどうしたらよいかという観点から、今年度の実践を補足する。

### 2.2.1 古語を使い「古人とともに遊ぶ」という感覚

有木・杉村・千野の授業に共通する点であるが、古語や漢文を用いて自ら作品を作る経験をさせることが、古典に親しむ態度を育成する上で有効であると考えられる。その際、留意したいのは、1.4 に示したような日本の古典が有する重層的な構造を生徒に意識させることであろう。たとえば杉村の歌物語実作は、実際の和歌に基づいて、その前後の文脈を想像させつつ、擬古文を書かせるものである。古典作品と自分の創作との関係性が意識化されるところに授業の眼目がある。中学1年生を対象とした柳句実作もまた、実作のみが目的ではなく、古典や歴史を題材にして、江戸時代の人を楽しんだように、自らも言葉遊びを工夫しつつ、いわば江戸の人と一緒に遊んでみるという感覚を重視する。有木の詩語カードによる漢詩実作は、古代から近世に至るまでの日本の教養人が歩んだ道を、追体験させるという試みである。

授業に十分な時間をかけることができなかったが、「北寿老仙をいたむ」を英訳する試みも、意図するところは似ている。江戸時代中期、美濃派俳人を中心に、中国の古典である漢詩を仮名詩に置き換えることが試みられたが、私たちもまた、江戸の「仮名詩」を異なる言語に置き換えて楽しんでみよう、英訳に取り組んだのである。生徒が発した、「英語にすると実に分かりやすい」という感想は、作品がそれを表現する言語と密接に関係していることを、図らずも明らかにしている。言語を替えることによって生ずるギャップが面白いのである。

言うまでもなく、江戸時代の人にとっても古典は古典として存在したのであるし、この構図は室町時代以前も全く同じである。それぞれの時代の人々が、その時代にすでにあった「古典」の描き出す世界を敬い愛し、そこに自らが作り出す新しい世界を重ね合わせるべく、本歌本説取りをしたり、洒落のネタにしたり、

ときにパロディー化したりして、古典に親しんできた。このような古典との親しみ方は、私たちが模索する「生涯にわたって古典に親しむ態度」の一つの答えとさえまいか。

### 2.2.2 古典教材のありかた

前節に述べたような観点から現在の教科書教材を眺めると、2点、検討の余地があるように思われる。

1点目は、1.4 で言及したように、現行の教科書教材が、古典という教科に期待されているところを十分に汲み取れていないのではないかという問題である。前掲の調査において指摘したように、生徒が日本人として海外の人に紹介するに値すると感じる作品と、教科書に採られる作品とが、比率・バランスの面でかなり隔たったものになっている。もちろん、本稿における調査は十分なものとは言えないから、より本格的な調査の必要があるだろう。しかし少なくとも、海外での俳句や俳諧の高い評価と、古典教育の場での俳句・俳諧の扱い方との間には大きな落差があると言わざるをえない。

海外に日本文化を紹介するといった場面では、浄瑠璃・歌舞伎・能・狂言が、ことあるごとに取り上げられている。あるいは、今回の調査で上位に挙げられた連歌や連句は、連作でも群作でもない、極めて特異な文学形式であり、おそらく日本以外の国ではほとんど見られない形式のものではなかろうか。こうした古典が、教科書でほとんど一顧だにされないのは偏りと言わざるをえない。教える側の知識の問題、あるいは評価の仕方や大学入試との絡みもあり、取り上げにくいことは確かであるが、古典教育に携わる者の間で問題を共有し、知恵を出し合う必要があると考える。

2点目は、教材を選ぶ視点が〈現代〉に固定されてしまっているという問題である。言い換えれば、現代人の価値判断を基準とした古典を選ぶ意識が強いということである。そういう選択基準を否定するわけではないが、一方で、古典の書かれた時代においてすでに「すぐれた古典」は存在していたのであり、そのような古人の視点が教材選択の場にもっと尊重されてよい。今ある教材においても、作中に、先行する別の古典への言及を含むような場合は、その言及される「古典」を今以上に大切に扱いたい。教材編集においては、作品と作品とがリンクするような構図をより鮮明に生徒に示せるようにすることが望まれる。

文責 千野浩一